

二〇世紀初頭の美術交流における新納忠之介の活動
——ポストン美術館関係者との交流を中心に——

清 水 恵 美 子

はじめに

近代日本の文化財保護の礎を築いた岡倉覚三（一八六三—一九一三）は、一八九八年（明治三十一年）日本美術院の研究部（後の日本美術院第二部、現公益財団法人美術院）において、古社寺保存法に基づく仏像修理を開始した。その中心となつたのが新納忠之介（一八六八—一九五四）である。損傷した仏像を数多く修理し、一九四六年（昭和二十一年）に美術院長を引退するまで仏像修理の最前線で活躍した新納は、岡倉の文化財保護の理念の継承者と位置づけられている。一方でポストン美術館と関係を持ち、戦後連合軍総司令部民間情報局の文化財調査視察に同行するなど、国際的なネットワークを構築して活動していたことはあまり知られていない。

これまで新納の研究は彼を岡倉の文化財保護の理念の継承者として、主に文化財修復の観点から行われてきた。これらの研究は新納の国内での活動に焦点をあてるもので、国外との交流で成し遂げられた業績は等閑視されてきた。しかし、二〇一四年（平成二十六年）度に茨城県天心記念五浦美術館へ寄贈された新資料（新納忠之介旧蔵資料。以下「新納資料」）約二、三〇〇点の中から、外国語の書簡や海外での活動が記された手帳、ポストン美術館や戦後の文化財調査視察の写真など、彼の活動がグローバルに展開されたことを示す資料が数多く見つかった。執筆者は同美術館の協力を得て、これらの資料の調査を進めている。

本稿は、調査の現時点での成果を紹介しながら、主に岡倉のポストン美術館勤務時代における新納の活動に焦点をあて、同美術館関係者

との交流を中心に、その意義を検討するものである。日米美術交流という視座から、新納の国際的な文化財保護活動を考察する研究の端緒としたい。

1 新納忠之介の業績と国外での活動

新納は、一八八九年（明治二十二年）東京美術学校に第二期生として入学した。一八九四年（明治二十七年）に同校彫刻科本科を卒業し、東京美術学校雇となり、翌年助教となる。一八九七年（明治三十一年）東京美術学校が中尊寺金色堂の修理を請け負った際は、工事主任として仏像修理を担当した。同年、古社寺保存法が公布、施行される。一八九八年（明治三十一年）東京美術学校騒動が起きると新納は連袂辞職するが、日本美術院が設立されるとその正員となり、古社寺保存法に基づいて寺社の仏像神像修理を開始した。一九〇一年（明治三十四年）奈良東大寺法華堂諸仏修理に着手すると奈良に移住し、一九〇六年（明治三十九年）日本美術院規則が改正されると第二部（文化財修復部門）の責任者となる。その事務所は東大寺勸学院に置かれた。岡倉が没した後、一九一四年（大正三年）第二部は日本美術院より独立して美術院と改称、新納は院長として修理事業を継続した。一九四六年（昭和二十二年）に院長を引退するまで、文化財修復の事業に従事した。

このような新納の業績を概観すると、彼は岡倉の文化財保護の理念の継承者であり、仏像神像修理の第一人者として日本の文化財保護行政を牽引してきた人物であると位置づけられる。それゆえ、先行研究は、仏像や文化財の修復保存に関するものが中心であり、新納の国内

での活動に焦点をあてるものが多い。^①

一方、新納の活動を国外に拡大して俯瞰すると、一九〇六年（明治三十九）ポストン美術館中国日本美術部キュレーター訓練候補生として来日したラングドン・ウォーナー（Langdon Warner 一八八一—一九五五）に仏像彫刻を指導し、一九〇九年（明治四十二）ポストン美術館に派遣されて、仏像修理、新館展示、美術館教育に従事した。^②

一九一〇年（明治四十三）には日英博覧会の美術館で摸型組立工事監督を嘱託され、欧州、アフリカを歴遊して帰国した。一九一一年（明治四十四）にはポストン美術館中国日本美術部鑑査顧問となるなど、岡倉を仲介にポストン関係者との国際的なネットワークを強めていき、大正期まで同美術館の仏像購入に従事した。^③ さらに一九三二年（昭和七）大英博物館の依頼で百済観音立像模造を完成させ、一九三六年（昭和十二）ポストン美術館館長らを法隆寺、東大寺、春日大社等に案内し、一九四六年（昭和二十）連合軍総司令部民間情報局最高顧問として来日したウォーナーの文化財調査視察に同行するなど、戦前戦後の美術交流における新納の存在は看過することができない。彼の活動がグローバルに展開されてきたことから、新納の業績は美術交流という国際的な視座から考察される必要がある。^④

茨城県天心記念五浦美術館に寄贈された「新納資料」は、この課題に寄与し、新納研究を大きく発展させる可能性を持つ。「新納資料」は、新納が携わった業績に関する書簡、葉書、写真、調査文書、図面、雑多な事務文書など様々な形態の資料で構成され、新納の業績の多様性、重要性を物語っている。本稿にて取り上げるポストン美術館に関する資料は、主に書簡と写真類からなる。「新納資料」には新納宛外

国語書簡が一二一点あるが、このうちラングドン・ウォーナー関連書簡は四十三点、それ以外のポストン関係者書簡は三十九点あり、ポストン関係者の書簡がおよそ七割を占めている。^④ 本稿はこれらの書簡の一部を紹介し、岡倉のポストン美術館勤務時代における新納の活動について考察する。

2 ネットワーク構築の萌芽

(1) コレクション拡充における役割

一九〇四年（明治三十七）のポストン美術館着任当初、岡倉の目的は日本美術コレクションの調査であった。やがてそれはコレクションの発展へと転換する。翌一九〇五年（明治三十八）二月二十三日、評議委員会において岡倉は次のように演説したと記録されている。^⑤

岡倉氏は、これまでその人生を日本の美術品を日本に留め置くことに捧げてきたが、今や彼は東洋と西洋がお互いより良く理解し合うべきであるとの意見を持つようになったと述べた。（中略）アメリカこそ、東洋と西洋の中間に位置する家であり、当コレクションのごとき内容のものが作られるとすれば、日本美術にとっても最も望ましい。^⑤

アメリカを「東洋と西洋の中間の家」にたとえ、優れたコレクションの形成は「東洋と西洋がお互いより良く理解し合う」ために有意義であると説いた。これが岡倉の経営理念の核となり、美術館は購入資

金の拠出を決定する。

岡倉が日本美術コレクションの発展を目指そうとした目的は、一九〇五年一月の『ポストン美術館紀要』に掲載された「ポストン美術館の日本・中国絵画」という論文からうかがうことができる。

最後に、アジア美術の真の意味に近づく素晴らしい機会を、参観者に提供する重要性について触れておきたい。芸術の精神は普遍であるが、異なる民族の理想や生活哲学に多くの表現があるように、その形式はさまざまである。日本や中国の芸術は、ヨーロッパの芸術と同じようにその内側から解釈されることが必要であり、少しでも関心がある人は、珍しいものや不思議なものとして作品を扱うべきではない。私は、当美術館が、目録出版やコレクションに関する講演を通じて、東洋芸術のより深い概念を形成し、将来、芸術を愛する一般の人々や美術学生にとって最高の施設となることを願っている⁶⁾。

芸術を通して相互理解を深めようとした岡倉は、リーダーシップを発揮して日本人とアメリカ人が分担協業する職員構成を企図し、「アジア芸術」を対象とする部門の構築を目指した。美術品と参観者との橋渡しとなるべきアメリカ人スタッフは、岡倉との共同作業やコレクションの整理などを通して、東洋美術に関する知識や理解を深めていった。コレクションの修復保存や現地での美術品収集のために、専門技術を有した日本人が次々と事業に参画した⁷⁾。

新納忠之介は、仏教美術の購入において岡倉に的確な情報を与え、

その手助けをすることで、コレクション構築に重要な役割を果たした。岡倉書簡からその様子を見てみよう。たとえば、一九〇五年六月十一日、岡倉は米国から帰国後、茨城県五浦から新納に次の書簡を送っている。

藤原時代不動250の由御求メ置被下度 小生ハ当地ニ今式週間滞在の上帰京 金員ハ帰京の上御送り可申 右ニテ差支無之候や 京都の仏画ヲ求メタル骨董やニモ古仏像有之候由候 御序の節御一覽相願候⁸⁾

藤原時代の不動明王を二五〇円で購入してほしい、京都の仏画を扱う骨董店に行き古仏像の有無を確認して欲しい、という指示が記されている。数日後の六月十七日、岡倉がポストン美術館副館長マシュー・スチュワート・プリチャード (Matthew Stewart Prichard 一八六五〜一九三六) に宛てた書簡には、美術品購入の進捗状況が記されている。

これまでに確保した物は、

八世紀の小金銅仏 一軀

十一世紀から十四世紀にかけての仏像 五軀

この中の二軀は台座付で高さ六フィート、一軀は殆ど等身大、最小の物は約三フィート。

極めて優れた能面 三点

仏教絵画 四点

どれも極めて重要な物です。

これらは当地において汚れを除去し、修理しておくのが最善だと、私は考えております。そうすれば美術館に届いてからの面倒がないからです。⁹⁾

ボストン美術館には仏像を修復する専門家がない。そのため、購入した美術品は新納が必要な処置を施し展示に十全な状態にしてから米国に送付していたことが窺い知れる。その半月後の六月三十日、岡倉は新納に書簡を送り、さらなる指示を与えた。

観音地藏八百円にて宜敷 此分金ハ小生帰京の上(凡ソ十日内)

ニ御送り可申候 二天の式百七拾五円ハ宅へ申遣し候間不日御送り申候事ト存候

毘沙門天ハ余り不望敷候

絶品ナレハイザ知ラス御考如何ニヤ¹⁰⁾

「観音」と「地藏」を八百円で購入という岡倉の判断と代金支払の方法を伝えるとともに、毘沙門天像の価値について新納に意見を求めており、二人の間で検討を重ねて購入に至る様子が見てとれる。九月頃、岡倉は購入した仏像を納めた十四箱をボストンへ発送した。その内容は発送前の九月十九日プリチャードに送った書簡から知ることができる。

大威徳明王像、台座付。藤原時代の秀作ですが、一部に破損あり。

(私は破損部分の修理や補足をすべきでないと考えます。極めて稀少。) 五フィート十五インチ。

阿弥陀像、台座および光背付。藤原期の優品。五フィート。

阿弥陀(立像)、三フィート九インチ。足利期(光背付)。

阿弥陀(立像)、二フィート十五インチ。鎌倉期(光背付)。

観音立像、二フィート七インチ、足利期(光背付)。

地藏像、台座付、五フィート。一五二一の年記あり。

地藏像、台座および光背付、三フィート二インチ。鎌倉初期。

不動像、三フィート七インチ。藤原期。

毘沙門天像、三フィート八インチ。藤原初期。

持国天像、三フィート六インチ。藤原初期。

観音および勢至像一对、二フィート三インチ。足利期。

阿弥陀立像、二フィート二インチ。光背および台座付。¹¹⁾

ここから、前掲書中にある「二天」は毘沙門天像、持国天像を指すと考えられる。また、大威徳明王像は一部に破損があるが、岡倉はこの修理や補足をすべきではないと伝えている。ここに仏像の現状をあらわにそのまま維持し保存しようとする岡倉の文化財保護の考えがあらわれている。

同日、岡倉は新納にも書簡を送り「小切手金七拾円也御査収被下度 万事配慮の段難有存候」と伝えた。¹²⁾ これらの書簡から、(一)新納が市場や古美術商を調査した結果を岡倉に報告、(二)岡倉の判断に基づいて新納が美術品を購入、(三)岡倉は新納に購入代金を渡し、ボストンに送る、というコレクション購入の動きが把握できる。こ

の時送られた美術品は「中国日本部の新収品」(『ポストン美術館紀要』一九〇六年二月) および「新設された日本品陳列室の彫刻」(同、一九〇六年四月)にて紹介された。そして「アジア芸術の真の意味に近づく素晴らしい機会を、参観者に提供する」ため展示されることになる。

(2) 人材育成への寄与

一九〇六年(明治三十九)夏ポストン美術館中国日本美術部キュレクター訓練候補生として派遣されたラングドン・ウォーナーは、十一月頃から新納宅に滞在し指導を受けた。後に新納はウォーナーとの出会いを次のように振り返る。「日露戦争が終わったところだった。岡倉先生から一通の手紙が届いた。披いてみると、一米国青年を紹介するからよろしくとたのむといふのである。(中略) ちやうど法隆寺や興福寺の仏像を修理中だったので、しばしば修理現場に同道して、こまごまと説明をしてあげてゐるうち、すっかり研究を積んだやうだ。僕とはかれこれ二年ばかり一緒に暮した¹³⁾。『新納忠之介五十回忌記念 仏像修理五十年』(財団法人美術院、二〇〇三年、以下『仏像修理五十年』)巻末の略年譜によると、一九〇六年十一月頃に「ウォーナー、岡倉天心の指示により新納宅(勸学院)に寄寓し、約一年半その家族と生活をともにしながら、忠之介のもとで仏像彫刻を研究する。明治四一年九月頃奈良を離れる」と記される。

「新納資料」には、一九〇八年(明治四十二)九月六日、新納に宛てたウォーナーの書簡がある。

お手紙をありがとうございます。二日前に五浦から戻り、六角の仕事場にあります。先生はポストン美術館のため漆工の扱いを学ぶことを望んでおり、一週間ほど滞在します。そのあとあなた方に会いに奈良に参ります。どうか私が京都で購入した漆器と蒔絵の本をお送りいただけませんか。ご面倒でなければシャツも二枚お願ひします。六角さんからよろしくとのこと¹⁴⁾です。

ちやうどウォーナーが奈良を離れた頃の書簡である。ウォーナーが購入した本とともにシャツの送付を頼んでおり、すっかり打ち解けて親しくなった二人の関係が読み取れる。書中の「六角」は漆芸家の六角紫水(一八六七―一九五〇)を指す。六角は岡倉が美術館に着任した一九〇四年の五月から一九〇八年三月までポストン美術館に勤務し、主に漆工芸品の目録作成、修復、収納箱製作に従事した。「先生」とは岡倉のことである。

この約一ヶ月後、一九〇八年十月二十六日から新納は岡倉、および東洋美術史家、古社寺保存会委員である中川忠順(一八七三―一九二九)とともに、来日して古社寺保存会の調査団に参加した。ポストン美術館関係者を和歌山県熊野地方に案内した。同行したのは、美術史家でコレクターの美術館評議員デンマン・ウォルド・ロス(Denman Waldo Ross 一八五三―一九三五)、中国日本美術部アシリエイト・キュレイターのフランシス・ガードナー・カーティス Francis Gardner Curtis 一八六八―一九一五)、そしてウォーナーであった。

岡倉がポストン美術館長アーサー・フェアバンクス(Arthur

Fairbanks 一八六四—一九四四)に宛てた書簡によると、岡倉の合流は「同地での彼らの研究を手伝うため」であり、「ロス博士とカーティスは、古社寺保存会の小規模調査団に加わり、当地の古い寺院を調査したり、秘宝の開扉を行ったりしております。お二人がこの経験を楽しみ、かつそこから学ぶことがあってほしいと願っています」と報告した¹⁵。彼は中国日本部に関わる人材が、東洋美術の学識を持つ重要性を認識し、実地調査によってそれを彼らに身につけさせようとしていた。新納はその案内役としてアメリカ人スタッフの育成に寄与したことであろう。またこの旅行は、新納にとってウォーナー以外の中国日本部のメンバーと交流する機会となった。

このように、新納は岡倉の美術館着任以降、日本美術コレクション形成に参画し、ラングドン・ウォーナーの指導や古社寺調査の案内を行った。それはボストン美術館の人材育成に寄与するとともに、彼自身のネットワーク構築の端緒となった。

3 渡米とボストン美術館勤務

新納は一九〇九年(明治四十二)二月十日に渡米し、ボストン美術館での勤務を開始した。その主たる目的は、ボストン美術館新館における中国日本美術部の展示作業に参画することであった。新納派遣に關する話し合いは、先述した古社寺調査中になされたものと考えられる。一九〇八年(明治四十一)十一月六日、岡倉は熊野からフェアバンクスに宛てた書簡で、新館展示における新納の重要性を説いた。

私は個人的には、現時点では新館における展示を配置、整頓する作業を手伝える有能な助手をより必要としていてと考えています。相談の後、私たちは皆、書記を雇う前に助手を雇った方がよい良いとの結論に達しました。古社寺保存会および美術院の新納氏は有名な彫刻家で、展示作業には最適の人物です。ロス博士とカーティスも、共に彼のことを承認しています。ラングドン・ウォーナーは新納家に住み込み、彫刻についての教授は彼から受けたものです。彼が一年間、われわれを手伝うためにボストンに来るよう取り計らうことが出来ました。—従いまして、私たちの電報は同氏との契約を貴下が承認するよう求めるものです。(中略)私はこれからの展示作業にとって、新納氏の貢献は極めて貴重だと思えます¹⁶。

岡倉はこう述べて、翌一九一〇年(明治四十二)はボストンに戻らないため自分の給与と旅費が浮くので、給与の半分(百二十五ドル)と旅費の半分(片道二百五十ドル)を新納に支給して欲しいと依頼した。ほどなくして、フェアバンクスから新納の任命を承認する電報が届き、新納は米国へ旅立つこととなる。

岡倉が着任した当時、ボストン美術館はコプリー・スクエアにあったが、一九〇九年五月二日に閉館となり、同年十一月十五日ハンティントン通りに新館(現ボストン美術館)が開館した。岡倉は一九〇八年四月にボストンを離れ、ヨーロッパ経由で日本に帰国しており、ボストンに戻ったのは一九一〇年十月であった。つまり、新館における中国日本美術部の展示は彼の不在時になされたことになる。そのた

め、新納は岡倉の名代としてポストンに派遣されたと考えて良いだろう。ここに岡倉が新納に寄せた信頼の大きさを見て取ることができ。彼は一月二十五日奈良を出発し、二月十日船にて渡米した。のちに新納はポストンでの勤務の様子を次のように回想している。

僕がポストンに着いてから三ヶ月ばかりののち、旧館から新館への引越しが始まったのだが、その東洋部各室の陳列や、そのほか東洋関係の相談を受けた。元来あそこの日本美術品は、東京の大学へ講義に来てゐたフェノロサ、ビゲロー両氏の蒐集品が中心となつてをり、ほかにモールズ教授が蒐集した日本古陶も沢山あつて、焼きものだけで立派に一室を充実させてゐた。その後来朝したロース教授が大変金持ちで、奈良の玉井、森田などいつた當時の一流奈良骨董商から買ひ集めた古彫像がこの博物館に陳列されたのである。あそこの博物館東洋部は、もともとはあちらの技師が設計したのであるが、なかなか凝つたもので、仏像を陳列する室のごときは法隆寺金堂内部に模して造作されてあつた。画幅や屏風の陳列室は、和紙を貼つた明り障子をめぐらすなど気の利いたものである。⁽¹⁷⁾

新納は着任と同時に旧館から新館への引越しと新館展示の作業に従事したようだ。新館の展示は「仏像を陳列する室のごときは法隆寺金堂内部に模して造作されてあつた。画幅や屏風の陳列室は、和紙を貼つた明り障子をめぐらすなど気の利いたもの」であつたが、それは岡倉の構想の具現化だと考えられる。

『ポストン美術館紀要』に掲載された報告によると、新館の展示は「国の美術はその文明と理想を反映するものである」という考えを基礎に、元来作品が置かれていた雰囲気暗示させるような空間創出が試みられた。障子、襖、床の間、落ち着いた採光、天然木や壁土の使用によつて「日本人の優れた感性、とりわけ足利時代における禅の普及以降」の感性を表す環境作りが目指された。また仏像展示室には円柱や腕木を配し、奈良時代の寺院建築の様式に従つて作られた。⁽¹⁸⁾これらの記述は、新納の回想と合致する。美術品の配置は、日本美術の母体である中国美術から日本美術へと展開し、参観者が日本美術の歴史的發展を理解できるよう配慮されたものであつた。

中心になつて展示空間を構成し、インスタレーションを遂行したのはカーティスとされているが、「展示作業には最適の人物」として派遣された新納の助力を得てなされたものと考えるべきであろう。

新納は展示作業のほか、美術館教育にも協力した。一九一〇年三月三日「日本の仏像」というテーマで、特定の展示品に関して解説する教育プログラム「カンファレンス」を実施した。通訳をしたのは当時美術館嘱託員だつた富田幸次郎（一八九〇～一九七六）である、彼は一九一〇年三月日英博覧会の日本出品協会事務取扱を嘱託され渡英した後、一九一一年から中国日本美術部アシスタントとなる人物である。新納の手帳にはこの日のことが「本日ハ Boston 美術博物館ニ於テ日本ノ彫刻ニツキ講説ス聴衆八十余人大喝采ヲ受ク」と記録されている。⁽¹⁹⁾八〇名を超える参加があり盛況だつたようだ。

ところで『仏像修理五十年』の略年譜には「ポストン滞在中は美術館所蔵の仏像等を修理。」と記されている。当然コレクションの仏像

は確認したと推察されるが、現時点で具体的な修復活動に関する資料は見つかっていない。

新納がボストンを離れたのは一九一〇年三月二十九日であり、約一年間ボストンに住んでいたことになる。この間、新納はアメリカでの人的ネットワークを広げていった。「僕はボストンで一年あまり暮したが、その間にはウォーナー君の宅も訪問した。お父さんもお兄さんも信用ある法律家であつた。奥さんは音楽学校出のピアノストである」という新納の回顧が示すように、渡米前から親しかったウォーナーとは家族ぐるみつきあひをするようになっていた。²⁰たとえば、後にウォーナー夫人となるロレーン・ルーズベルト(Lorraine d'Orenieuk Roosevelt)は七月二十一日新納に次の手紙を送っている。

お手紙ありがとうございます。言葉にできないほど感動しました。あなたがいかにラングドンの良き真の友人であるかわかりました。私も友人になってくださり幸せです。次回ボストンに参るときは必ずお会いしたいです。私はラングドンと知り合つて数年経ちますが、彼は世界でもっとも騎士のように高潔な精神を持つ人だといつも思っています。あなたも同じ経験を多くお持ちのようですが、私の人生に本当に重要なこと—ラングドン・ウォーナーと私は大変幸運であるという事実—について同意してくださいますよね。あなたが友人のレディのことを、友人と同じくらい好きになってくださるようお願いしています。²¹

また、ロレーンの母親のローラ・ルーズベルトは二人の結婚式の

招待状を新納に送った。「親愛なる新納様 娘のロレーンとラングドン・ウォーナー氏が五月十四日土曜日十二時半に当地で結婚します。挙式と午餐にご出席くださいませ」。「当地」というのは、ルーズベルト家の邸宅があるニューヨーク州オイスター・ベイを指す。あいにく一九一〇年五月には新納はボストンから離れていたため出席はかなわなかつたが、この手紙は新納とウォーナーの近親者との親密さを十分表している。ウォーナー自身は一九〇九年九月にボストンを離れ再び日本に向かったが、旅先からしばしば新納に葉書を送っている。

ウォーナー一家と親交を深める一方、他の美術館スタッフとも新納は親しくなつていった。それを表す葉書を「新納資料」から見出すことができる。たとえば中国日本美術部コレクシヨン管理者のフランシス・スチュワート・カーショウ(Francis Stewart Kershaw 一八六九—一九三〇)は一九〇九年八月六日付で「これは駅から自宅に向かう道のポストカードです。数週間のうちにあなたをそこへお連れしたいと思ひます」と小道の風景が描かれた葉書を新納に送っている。また同部助手で絵画管理を担当していたジョン・アーサー・マックリー(John Arthur Maclean 一八七九—一九六四)は、八月十三日旅先から「本日ボストンに向けて出航します。一週間のうちに着く予定です」と書き送った。²²

ところで一九一〇年一月から岡倉の弟で英語学者の由三郎(一八六八—一九三六)が、教育財団ローウェル・インスティテュートに招聘され、日本文化に関する講演を行うためボストンに約三ヶ月滞在した。覚三を通して由三郎に講師を依頼したのはウォーナーであった。ウォーナーは日本美術研究のため来日した際、由三郎から日

本語を学んでいた。二月二十八日、由三郎の帰国を前に新納とウォーナーは会食し、その席上で三人は新納の妻すまに宛てて葉書を書いた。そこには「旦那様は御ぶじでございます 由三郎 ウォーナー」の後に「岡倉サンが大成功して本夜御出発日本に帰ヘリナサイマスニ付三人会合席上ニテ 忠之介」と記されている。²⁴

新納は一九一〇年三月二十九日ポストンを離れた。先述した新納の手帳によると一九一〇年三月十日「本夜 Mr. Ross 氏ノ招待ヲ受ケ Mr. Warner、Mr. Tomita ノ三人晚餐ノ饗応ヲ受ク」と記されており、別れを惜しむ会であったことが推察される。「Tomita」は、後に中国日本美術部の助手となる富田幸次郎（一八九〇〜一九七六）である。出発当日の頁には見送りに来た美術館スタッフの名が多く記されており、彼が一年余りの滞在でポストンにさらなる人脈を得たことがわかる。

4 渡米後の動向

(1) 中国日本美術部鑑査顧問への就任

新納はポストンから英国に渡った。渡英の目的は一九一〇年（明治四十三）開催の日英博覧会にあった。その準備は新納の滞米中、岡倉によってなされていた。一九〇九年九月二十六日、岡倉は新納に、米国からの帰途、日英博覧会の見学ができるよう牧野伸顕（一八六一〜一九四九）に交渉中のこと、その後欧州視察ができるように内務省宗教局長の斯波淳六郎（一八六一〜一九三二）に働きかけたことを伝えている。

陳レハ老兄明年帰途歐洲行ニ就而ハ牧野男爵大ニ配慮被致居且又（同便宜上ニモ有之）明年日英博覧会モ御一覽相成度事と存し旁同局へ交渉中ニ有之 別紙本日同男より来信有之同会審査員ニ多分内定の由ニ有之候に付不取敢御報申上候 猶又同博覧会結了後歐洲巡遊ニ就而ハ斯波氏とも協議中に有之是又追而可申上候 先ハ時下御自愛被下度候²⁵

四月六日ロンドンに到着した新納は、十一日に日本博覧会事務局を訪問した。二十一日には日英博覧会事務局より「日英博覧会美術館ニ於ケル摸型組立工事監督」を囑託され、現地でその任にあたった。手当は英貨六十ポンドであった。²⁶五月十四日に日英博覧会は開幕した。その後、新納は二世五姓田芳柳（一八六四〜一九四三）、東城鉦太郎（一八六五〜一九二九）らとともに欧州とエジプトを歴遊し、七月二十六日日本に帰国した。彼の日記やスケッチブックからその旅程をある程度把握することができる。

五月二十一日 ロンドン発、パリ着
五月二十四日 ルーブル美術館見学
五月二十六日 パリ発 ベルギー、ブリュッセル着
五月二十七日 ベルギー王立美術館見学 オランダ、アムステルダム着
五月二十九日 ドイツ着
六月四日 ミュンヘンからチューリッヒ経由でヴェネチアへ
六月七日 フィレンツェ着

六月九日 ローマ着

六月十七日 ナポリから乗船 地中海を渡りエジプト、アレキ

サンドリアへ

六月二十一日 ピラミッド、スフィンクス見学

六月二十二日 カイロ美術館見学

新納の日記やスケッチブックには、ベルリンの国立美術館のルード・ビヒ・クナウスの彫刻や、フィレンツェのベンヴェヌート・チェツリーニの胸像など、旅先で彼が観たものが描かれている。新納が欧州で何を見学し、心にとどめたのかを明らかにすることは、その後の活動にどのような影響をもたらしたのかを検討するために重要である。

帰国後の八月二十九日、新納は内閣より古社寺保存会委員に任命される。翌一九一一年（明治四十四）、新納はボストン美術館で新たな仕事に従事することとなった。四月二十一日、美術館は彼を中国日本美術部の Advisory Staff（岡倉の訳は「東洋部鑑査顧問」。本稿では「鑑査顧問」を用いる）に任命し、報酬として年額五百円を決議した。翌日、岡倉は美術館長フエアバンクスの書状を同封しこの決定を伝えた。

陳レハボストン美術館ヨリ別紙の通貴兄に東洋部鑑査顧問ヲ囑托し報酬として壹ヶ年金五百円贈与致度趣決議相成候ニ付何卒御承諸相成度候 任務の儀ハ時々藝術上の事ニ関し諮問ニ答ヘカーチス ワーナル諸氏ヨリ買上品の鑑定ニ応し其他当館の利益となるへき御報告ヲ願ひ候迄にて別段平素御面倒ハ相懸らざる次第ニ候 何卒御承諸相成度候 委細ハ本年九月小生帰朝之上可申上候 当館鑑査顧問は歐洲の諸大家モ加ハリ居候は、多少名譽の意味ヲ

有し居候²⁷

新納の職務は、芸術に関する諮問に加え、カーティスやウォーナーらが購入した美術品の鑑定とその報告であった。同日、中川忠順と、中国美術品の購入に尽力する早崎稜吉（一八七四—一九五六）にも鑑査顧問の囑託が依頼された。岡倉の書簡の末尾には「ワーナル御面倒相かけ候事と存候 カーチスハ来月末ニ日本ニ参り候」と記されたように、新納は来日するボストン美術館スタッフをサポートすることが期待された。「新納資料」には、日本で美術品収集に従事する美術館スタッフとの実務的なやりとりが残されている。この年に来日したフランシス・ガードナー・カーティスからの書簡はその一例である。

私は京都の終屋に向かい、五六日滞在した後東京に行きます。あなたが二、三日中に京都に来られないのなら、東寺への紹介状をお送りくださるとありがたいです。K.玉井氏（執筆者注 奈良の古美術商玉井大閑堂）に渡す七千五百円の小切手と、支払い済の二千五百円の領収書を同封します。良い折に彼に小切手を渡して、領収書はセンセイ（執筆者注 岡倉覚三）か私に送ってください。（一九一一年十月二十三日）

今朝あなたが話してくれた彫刻を見に、午後美術館に行つてケースを開けてもらいました。不動は余り気に入りませんでした。地蔵はとても良いと思えました。マタノ氏（所有者の名前だと思います）はいくらなら売る気になりますか。（同年十一月

一日)⁽²⁸⁾

新納が来日する美術館スタッフのために、美術館が所蔵すべき美術品の鑑定、所有者と美術館の仲介、購入時のサポートなどを行っていたことがわかる。

一九一三年（大正二）病気を理由に日本に帰国した岡倉は、五月十七日五浦から新納に手紙を送り、仏像購入に関する指示を与える一方で、「英文彫刻史及ボストン彫刻解説御編纂」の委嘱を考えている旨を伝えた⁽²⁹⁾。だが岡倉の病状は回復することなく、同年九月二日不帰の人となる。このように、新納がボストン美術館に果たした役割は、仏像を中心とした美術品購入、新館の展示、来日スタッフに対する助言や世話など多岐にわたっており、中国日本美術部の鑑査顧問に任命されるなど今後の活躍が期待されていた。

(2) 岡倉没後のボストンとの関係

一九一三年九月、岡倉がこの世を去ると、新納はそのことをボストンの知人たちに知らせた。そのひとりが社交界の有力者イザベラ・スチュワート・ガードナー (Isabella Stewart Gardner 一八四〇～一九二四) である。彼女は岡倉の理解者、支援者であり、新納をはじめ岡倉を仲介に渡米した日本人たちを援助した。同年九月十四日、新納はガードナーに日本語の書簡を送った。

拝啓仕候 今回岡倉先生御逝去ニ付其悲報を御許様ニ可致事無此
上遺憾ニ御座候 先生の御逝去ハ近頃相互の爲め一大損失ニ御座

候（中略）去る二日午前七時三分睡るか如く瞑目され候 遺骸ハ棺ニ納め白布を以て之れを包み其上ニ赤倉山別荘ニ咲き乱れし秋の各種の草花を以て麗ハしく被ハれ三日朝東京ニ移し奉り五日いとも莊嚴ニ葬儀挙行され候⁽³⁰⁾

書中の「先生の御逝去ハ近頃相互の爲め一大損失ニ御座候」との文
言から、岡倉の死は日米二国間にとって大きな損失と痛感していたこ
とがわかる。十月十日、彼女は新納へ返事を書いた。

岡倉氏の病氣のこと、お亡くなりになったこと、知らせてくださ
りありがとうございました。彼の死はとてつもなく大きいです。彼
のいた場所は二度と満たされることがないと感じます。彼の死
は、家族や友人や祖国にとっても恐ろしいことです。私どもの可
哀想な美術館が、彼の死でどうなってしまうのか、あえて考えな
いようにしています⁽³¹⁾。

彼女自身の深い悲しみや喪失感に加えて、岡倉の不在によるボス
トン美術館の行く末を憂慮し不安を感じていたことが察せられる。
実際、ボストン美術館関係者にとって岡倉の死の衝撃は大きいもので
あった。館長アーサー・フェアバンクスは、九月六日新納に手紙を送
り、その心情を吐露している。

電報で岡倉氏の死を知り、私たちは皆深い悲しみに包まれていま
す。ご子息へお悔やみを申し上げたいのですが、彼の正確な住所

を知らないので、同封した手紙を転送していただけるでしょうか。日本のあなた方と同じくらいボストンの私たちもどうしようもない喪失感に苛まれています。もし彼が私たちに何か手紙や、提案を残していたら、必ず私にお送りください。あなたも日本の友人たちも、ともに彼を失ったことに対して、ボストンの多くの友人たちが心からの同情を寄せていることを理解してくださいと信じています。³²

フェアバンクスは「もし彼が私たちに何か手紙や、提案を残していたら、必ず私にお送りください」と伝えて、岡倉がボストン美術館に対して何か言い残していないかを知りたがった。このようなフェアバンクスに対し、十月十三日新納は返事を送った。

九月六日にあなたの手紙を受け取り、すぐ岡倉先生の御息に送りました。日本は岡倉氏の死によって大きな失望に包まれています。私は日本でいつでも喜んであなたの依頼に応えます。³³

双方で深い悲しみを共有しながらも、新納は「私は日本でいつでも喜んであなたの依頼に応えます」と綴った。岡倉がボストンでなそうとしていた理想を受け継ぎ、美術館と協力して実現していくために尽力したいという気持ちがかがわれる。このような新納の気持ちに呼応するように、十月二十二日のフェアバンクスの手紙は未来へ一歩踏み出すものであった。

岡倉覚三氏の今際の際とご逝去について丁寧に教えてくださり、ご親切に感謝いたします。ボストンにいる彼の多くの友人は電報でその死を知り、深い衝撃に襲われました。あなたの手紙のおかげで、私たちの失ったものがいつそう鮮明になったと感謝しております。日本でもアメリカでも彼のことを忘れることは決してありませんし、彼の精神は美術館の運営を導いていくと信じています。私は岡倉氏が仕事で計画していたことについて弟の岡倉由三郎氏に手紙に書いています。あなたが中国日本美術部のアドバイザーの一人として引き続き協力してくださいと意思があたりだと確信しています。たとえ影響力のある指導者を失ってもあなたの仕事は継続していくものと信じています。³⁴

ボストンにおいて岡倉の記憶は色褪せることなく、今後も「彼の精神は美術館の運営を導いていく」と信じているところに、岡倉の存在がいかに価値あるものであったかを推察することができる。フェアバンクスは、岡倉の死後も彼が唱えた美術館経営の理念や描いたビジョンが、残された人々に受け継がれていくことを願った。そのため兄の良き理解者である岡倉由三郎に、何か伝言が残されていないか手紙を書いた。そして新納には引き続き美術館との関係を維持して欲しいと要請した。十一月十日のフェアバンクスの書簡は、日本人と協力していく重要性をより強く訴える内容となっている。

先日あなたにお話しした続きとなりますが、これまで岡倉氏の見事な指導のもとで示され、実行されてきた方法において、アジア

美術を収集し解説する事に全力を傾注していくことは、彼の思
い出に多大な栄誉を与えることになると思います。そのため私た
ちは、この美術館を守る最も重要な一歩は、可能であれば、まず
岡倉氏が信頼した学識と品格ある優れた人物の貢献を引き続き得
ることだと感じています。それゆえ、私は中川氏、長尾氏、早崎
氏、そしてあなたに、中国日本美術部の専門家委員会 (Committee
of Experts) の設立に参加していただきたいと思えます。そのお
仕事は私たちが興味のある中国や日本美術の事に関して援助して
いただくことになるでしょう。東洋美術に関しては、中川氏が美
術館鑑査顧問の長になることが岡倉氏の希望だったので、私は提
案した組織の委員長を彼に依頼しています。これまでと同様、将
来においても、美術館があなたから貴重な貢献をいただく恩恵を
得られますようお願いしております。⁽³⁵⁾

個々に任命された鑑査顧問を集約する形で、中国日本美術部の専門
家委員会 (Committee of Experts) を設立し、そのリーダーとして中
川を考えていることを伝えるなど、フェアバンクスの考えはかなり明
確で具体的になっている。岡倉が進めてきたアジア美術に関する事業
を發展させることが、彼の名誉を高めることになり、美術館を守るた
めに、新納たち鑑査顧問の力を結集する必要があると懇願している。
新納が由三郎を介して大正期まで美術館と関係を持ち、鑑査顧問の仕
事を継続した背景に、美術館側の強い要望があったことがわかる。

一方、中国日本美術部のスタッフたちは、岡倉を通して「東洋」に
ついて多くのことを学び、理解を深めてきた。その知の源泉であり、

精神的な支柱を失ったことに対する嘆きは大きかった。十月十五日、
ジョン・アーサー・マッククリーンは新納に手紙を書き、師を亡くした
悲しみを切々と訴えた。

ここアメリカでは私たちの多くが、友人で、賢者で、思慮深い評
議員で、東洋を知る頼みの綱を失ったことを痛切に感じており
ます。しかし、あなたのほうが、その死をいかに強く感じてい
ることでしょう。いつも行動をともし、長年とても親しくして
きた同国人なのですから。まずは、彼のご家族に、特に悲しみに
くれる奥様にお悔やみ申し上げます。それから、彼をよく知る日
本のあなた方に申し上げます。最後に、発言者の舌を失ったあな
たの国にお悔やみを申し上げます。その舌が話すことを許された
なら、あるいは話そうとしたならば、お国をさらに偉大にしたか
もしれません。国々は嘆き悲しんでいます。とりわけ日本、イン
ド、アメリカの三国はそうだと思います。これら三国のうち、時
間が経つにつれて彼の不在を最も強烈に感じるようになるのは私
の国です。なぜならば、あなたのお国は、彼の偉大な知恵と知識
に同じ言葉でアクセスすることが出来ますし、それらがあなたの方
に与えられてきたことは疑いようもないからです。インドはおそ
らく彼の友情の価値をほとんどわかっています。一方アメリカ
は、ここ最近の数年間で彼の存在がもたらした恩恵に気づき始め
ました。それは、彼が私たちに与えた大きな良い財産です。彼が
二度と帰らぬ人となった今、私たちは心から深く嘆き悲しんでい
ます。彼を呼び戻すことができるのならそうするのに！しかし、

私たちにそのような力はありません。謙虚にお辞儀をして顔をあげて、彼が惜しみなく与えてくれた物事に感謝し、かつて「東洋美術世界」の研究者として知られた偉大な友人に称賛と名誉を与えます。彼が教えてくれた精神を私は決して忘れないでしょう²⁶。私が死んでも後に続く者がいて、後世まで残ると信じています。

書簡にはデンマン・ワールド・ロスから岡倉覚三との思い出を記念してボストン美術館に寄贈された中国の仏像に関する新聞記事“Rare Chinese stone given Art Museum”（十月十六日号）が同封されていた。

これらの書簡から、岡倉没後、ボストン美術館が中国日本美術部運営における彼の理念や計画を引き継ぎ、東洋美術のコレクションの形成と普及に尽力することを決意したこと、そのために専門家委員会の設立を計画し、新納らに引き続き日本人アドバイザーの協力を要請したことが明らかであろう。そして新納は美術館の要請を受けて、引き続き美術品鑑定やコレクション形成の援助を通して、日本とボストン美術館をつなぐ役割を担っていくことになったのである。

おわりに

これまで見てきたように、岡倉のボストン美術館勤務時代は、新納の国際的なネットワークの基盤が形成された、いわば萌芽期と位置づけて良いだろう。岡倉を仲介にスタートした新納の美術交流は、一年間にわたる美術館勤務で広がり、その後の相互交流によって深化して

いった。岡倉没後も、美術館は岡倉の理念を尊重し、それを共有する新納ら日本の関係者とのネットワークを維持することを決意した。要請を受けて、新納は中国日本美術部の鑑査顧問を継続することとなる。

しかしながら、ボストン美術館で新納がどのような美術品を修復したのかはいまだ明確ではない。果たして美術品修復が業務であったのかも、さらなる調査を通して検討していかなければならない。同時に、日英博覧会への参画や欧州およびエジプト歴訪についてはボストン関係者以外の「新納資料」を調査する必要がある。本稿で明らかにしたことをもとに、大正期から昭和戦前期における国際的な活動の広がり、戦時期の断絶、そして戦後期の復活という美術交流の視座から、新納の文化財保護に従事した生涯を考察していきたい。

附記

本研究はJSPS科研費18K00183の助成を受けたものである。本稿は日本比較文学会東京支部例会（二〇一九年四月二十日）における報告の一部をまとめたものである。「新納資料」の調査に関しては茨城県天心記念五浦美術館の中田智則氏、および茨城県近代美術館の稲葉睦子氏、資料解説に関しては本学教育学部の小林英美氏の協力を得た。記して謝辞を表したい。

註

(1) 『新納忠之介五十年忌記念 仏像修理五十年』（財団法人美術

- 院、二〇〇三年）、新納義雄「日本美術院による国宝修理―明治三十年代の彫刻修理を中心に」（『ワタリウム美術館の岡倉天心・研究会』、右文書院、二〇〇五年）、西村杏太郎「岡倉天心と文化財保護―美術院に受け継がれる伝統」（『岡倉天心と文化財』、茨城県天心記念五浦美術館、二〇一三年）などがある。
- 公益財団法人美術院で行われた文化財修理については『美術院紀要』第一巻〜第八巻（公益財団法人美術院、一九六九年〜二〇一六年）にまとめられている。
- (2) 拙著『岡倉天心の比較文化史的研究―ポストンでの活動と芸術思想』（思文閣出版、二〇一二年）一八三〜一八五頁。
- (3) 拙著『洋々無限―岡倉天心・覚三と弟由三郎』（里文出版、二〇一七年）一七八〜一七九頁。
- (4) 『茨城県天心記念五浦美術館所蔵 新納忠之介旧蔵資料目録Ⅰ』（茨城県天心記念五浦美術館、二〇一六年、以下『新納忠之介旧蔵資料目録Ⅰ』、『新納忠之介旧蔵資料目録Ⅱ』（茨城県天心記念五浦美術館、二〇一八年）、『新納忠之介旧蔵資料目録Ⅲ』（茨城県天心記念五浦美術館、二〇一九年）。
- (5) “Notes of Address Delivered by Mr. OKAKURA to the Committee on the Museum”, *Okakura Kakuzo Collected English Writings* 3, Heibonsha, 1984, p. 360.
- (6) Okakura Kakuzo, “Japanese and Chinese Paintings in the Museum”, *Okakura Kakuzo Collected English Writings* 2, Heibonsha, 1984, pp. 86-87.
- (7) 拙論「岡倉覚三のポストン美術館中国日本美術部経営―美術館教育を中心に―」（『文化資源学』六、二〇〇八年）二三〜三五頁。
- (8) 『岡倉天心全集』六（平凡社、一九八〇年）一九八〜一九九頁。
- (9) 同右書、二〇一頁。
- (10) 同右書、二〇四頁。
- (11) 同右書、二一四頁。
- (12) 同右書、二一六頁。
- (13) 松本楯重「古拙翁懐旧談叢」（一九四九年）（『新納忠之介五十年忌記念 仏像修理五十年』、財団法人美術院、二〇〇三年）九八〜九九頁。
- (14) 新納宛ラングドン・ウォーナー書簡、茨城県天心記念五浦美術館所蔵「新納資料」。
- (15) 註(8)前掲書、三三三〜三三四頁。
- (16) 註(8)前掲書、三三四〜三三五頁。
- (17) 松本註(12)前掲書、九九頁。文中の「フェノロサ」はアーネスト・フランシスコ・フェノロサ、「ビゲロー」はウィリアム・スタージス・ビゲロー、「モールズ」はエドワード・シルベスター・モース、「ロース」はデンマン・ロスを指す。
- (18) “Department of Chinese and Japanese Art,” *Museum of Fine Arts Bulletin* 7, 1909, p.59.
- (19) 新納忠之介の日記「新納資料」。
- (20) 松本註(12)前掲書、九九頁。
- (21) 新納宛ローレン・ルーズベルト書簡、「新納資料」。
- (22) 新納宛ローラ・ルーズベルト書簡、「新納資料」。
- (23) 新納宛フランシス・ガードナー・カーショウの葉書、およ

- び新納宛ジョン・アーサー・マッククリーンの葉書、「新納資料」。
- (24) 新納すま宛新納忠之介・岡倉由三郎・ラングドン・ウオーナーの葉書、「新納資料」。
- (25) 註(8)前掲書、二六八〜二六九頁。
- (26) 日英博覧会事務局 辞令・新納忠之介宛「新納資料」。『新納忠之介旧蔵資料目録Ⅱ』一九頁に資料の画像と原文が掲載される。
- (27) 『岡倉天心全集』七(平凡社、一九八〇年)六二頁。
- (28) 新納宛フランシス・ガードナー・カーシヨウ書簡、「新納資料」。『新納忠之介旧蔵資料目録Ⅱ』三七、三八頁に資料の画像と原文が掲載される。
- (29) 註(27)前掲書、二四九頁。
- (30) イザベラ・スチュワート・ガードナー宛新納の手紙、墨書、英訳タイプ稿付、マイクロフィルム、ボストン公共図書館所蔵。この書簡には英訳が添えられており、岡倉由三郎か富田幸次郎が訳したものと推察される。
- (31) 新納宛イザベラ・スチュワート・ガードナー書簡「新納資料」。『新納忠之介旧蔵資料目録Ⅱ』三九頁に画像と原文が掲載される。
- (32) 新納宛アーサー・フェアバンククス書簡「新納資料」。『新納忠之介旧蔵資料目録Ⅱ』三三頁に註(32)〜(34)の資料の画像と原文が掲載される。
- (33) アーサー・フェアバンククス宛新納書簡「新納資料」。
- (34) 新納宛アーサー・フェアバンククス書簡「新納資料」。
- (35) 新納宛アーサー・フェアバンククス書簡「新納資料」。『新納忠之介旧蔵資料目録Ⅱ』三四頁に資料の画像と原文が掲載される。
- (36) 新納宛ジョン・アーサー・マッククリーン書簡「新納資料」。『新納忠之介旧蔵資料目録Ⅱ』四〇頁に画像と原文が掲載される。
- (二〇一九年六月二日受理)
- 〔しみず えみこ／所員・本学全学教育機構准教授〕